
山西探偵事務所

なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山西探偵事務所

【Nコード】

N1054U

【作者名】

なお

【あらすじ】

『浮気調査に人探し、雑用だっていたします。ご用がある方はぜひ山西探偵事務所まで。電話一本で駆けつけます。ただし、依頼料はこちらの独断と偏見で決めますが。』この話は、金さえあれば何もいらない所長と個性豊かな従業員が繰り広げる物語である。

File 1・なけなしの3000円（前書き）

こんばんは（・・）

この作品は不定期掲載でやっていこうと書いたのですが、よかったら読んでやって下さい。

それでは、スタート（・・）

File 1・なけなしの3000円

「…では、11時に其方に伺います、はい…、ありがとうございました。」

その依頼の電話が舞い込んだのは、時計の針が10時を回った頃で、『山西探偵事務所』と書かれたドアを、この探偵事務所の従業員で一番下っ端の広海陽平ヒロミヨウヘイが開けたのと同時だった。

「おはようございます。仕事ですか？」

「広海くん、おはよう。ええ、そうよ。」

電話を切り、広海の挨拶に笑顔で応える女性。名前は、林明日香ハヤシアスカといい、この探偵事務所ですぐ接客と事務を担当してくれている。

「麗子さんからの依頼でね、11時に彼女のお店に伺うことになったわ。」

依頼の相手、つまり麗子とは、この麻木町アサギで一・二を争う高級クラブ『雅』ミヤビのママであり、所長の古くからの友人である。

「麗子さんから…？依頼内容は？何か厄介な事件にでも巻き込まれたんでしょうか？」

だとしたら、腕が鳴る。彼女には悪いが、ここの所、探偵らしい依頼に巡り会えなかったので、そろそろ独り立ちする為にも、ここらで一発でかい山にありつきたい。

そんな広海の思惑を察した明日香が、申し訳なさそうに眉を八の字にしてこう言った。

「…うーん、期待を裏切るようで悪いんだけど、依頼の内容は広海くんが思ってるようなものじゃなくて…」

ギョロリギョロリと、銀簞会に、弁当を届けるんだよ。」

言いにくそうな明日香の言葉に被せたのは、同じくここの従業員で、経理も担当している土浦琉二ツチウラリュウジだった。

「あ、土浦さん！おはようございます。珍しい…、今、来たんですか？」

「…おはよう。いや、銀行に今月の支払いに行って帰ってきたところだ。」

何かあったのだろうか、機嫌が悪いことを隠さずそう答える土浦に広海が首を傾げる。

そんな広海とは対照的で、土浦の機嫌の悪さの原因にピンときた明日香が笑いながら言った。

「その様子じゃ、所長と連絡取れたみたいね？」

「ええ…、」

「所長はなんて？」

「今から大事な仕事があるから帰れないそうです。」

「所長、厄介な案件でも抱えてるんですか？」

「さあな…ただ、電話口から聞こえてきたアナウンスが、第3レースを開始すると言ってたな。」

どんな仕事やらと、眉間に手をやりため息をついた。

「所長…、また競馬に行ってるんですね。」

大がつく程の競馬好きな所長は、何かと口うるさい土浦の目を盗んでは、度々、競馬場へと足を運んでいた。

探偵という職種が儲かるかと聞かれれば、大概の探偵が首を横に振るだろう。ドラマみたいに殺人事件を解決するわけじゃなく、主な仕事と言えば、浮気調査や人捜しといったところだ。しかし、これらの仕事だって毎日あるわけではない。そうなつてくると、便利屋みたいな仕事にも、必然的に手をださざるをえないのだ。うちの事務所は、どちらかというと後方の仕事が主なので、貰える報酬も多いわけではない。自分を含めた従業員4人の給料、ビルごと借りている探偵事務所の家賃、それに光熱費やら通信費を加算すると、競馬に行く余裕が、どこから出てくるのか広海には謎であった。

「ま、夕方には帰ってくるでしょ？最近、行くの我慢してたし…許してあげましょう。それより、約束の時間に合わなくなっちゃう…広海くん、」

「は、はい!!」

「麗子さんの依頼、よろしくお願いしますね。」

「これで、お前も一人前だな。」

ただ、弁当を届けるだけなのに、二人のどこか含みのある笑みと物言いに引つ掛かりつつも、とりあえず依頼主の待つ店へ向かおうと広海は、来たばかりの事務所を後にするのだった。

「…早いわね、また一年が始まるわ。」

「この依頼から、うちの事務所は始まったんでしたっけ。」

「そうよ、所長の最初の仕事で、その次の年は私、また次の年は大川くん、そして去年は、土浦くんだったわね。」

「認めてもらう儀式みたいなもんですね。」

「それにしては、簡単な仕事だけだね。」

「それでも価値ある仕事ですよ。」

「…そうね。」

駆けて行く広海の背を見送りながら、二人は、彼と同じだった頃の時を思い返していた。

「ああ」…!? な、何で抜かれんのよ!？」

Tシャツにジーンズそして健康サンダルの出で立ちで、手にした馬券を握りしめそう叫ぶ女。

「いくらつぎ込んだと思ってるの!!! ちんたら走ってんじゃないわよ!!!」

「まあ、落ち着いてお姉さん…1レースぐらい気にすることないよ。」

「1レースぐらいですって? 悪いけど、今のところ全レース外してるから? 外野は黙ってる!!!」

一目を引くほど美しい顔が、台無しになるくらい凄みのある顔で、隣の見ず知らずの中年男に喰ってかかる。

「……ん? ねえ、それ…当たり前馬券?」

「え、あ…ああ、そうだけど?」

ジッと、微動だにせず、自分の手元の馬券を見つめる女に、たじろぎながらそう答えた。

「そう……よし、それ今すぐ換金して半分よこしなさい。」

「な、なんで!？」

「なんでって、あたしが今のレースで財布ごとスったからに決まってるでしょ？」

「そ、そんな理不尽な!？」

「心配しなくてもいいわ!すぐに倍にして返してあげるから。」

「絶対無理!!その台詞を吐いて、倍になったやつなんてオジサンはみたことない!!」

「うるさいわね!何でもいいからさっさと換金してきなさい!!」

「ひ、ヒイ!!」

「おいおい!どんな恐喝の仕方だよ?今時、ヤクザでもそんなことしねーぞ。」

「ああ!？」

声がする方へ振り返えると、そこにいたのは、180cmを優に越えグレーのスーツに身をくるんだ、堅気の人間とはかけ離れた雰囲気^{アイ}を放つ短髪の男が立っていた。

「愛、^{アイ}搜したぜ?」

男は、サングラスを外しながら愛と呼んだ女の隣に立った。

「チッ、ヤクザが何の用だよ!。金なんて借りた覚えはないわよ?人違いじゃない?」

「今日は、仕事じゃねーよ?」

「あ、そ。あたしは、てつきり銀簞会の幹部様が、直々に取り立てに来られたのかと思ったわ。」

「フツ!随分とつれない言い方だな。俺とお前の仲なのに。」

どんな仲だと、言葉を返すのが面倒くさかった女は、心の中で悪態をつき、隣の男に目を向けた。

「今日!、何の日分かるか?」

「!今日?さあ?」

首を横に振る。今日が何の日か本当は知っているが。

「…俺の誕生日だ。もう40になる。」

男は、左手を女の頬に、もう一方の手を腰に置きながらそう言った。

「そう。おめでとう。じゃあ、あたしは今から換金場に行くから……って、」

男の手を容赦なく払い落とし、その場を去ろうと中年男に目をやるが、すでに走り去った後だった。

「どこ行つた!? あたしの金づる!？」

「ああ…恐喝相手ならちよつと睨んでやったら逃げてつたぜ?」

「なんてことを…、」

「どうでもいいだろ? 俺がいるのに、他の男なんて見るんじゃないよ?」

「どうでもよくないわよ!? スつた分取り戻さないと琉二にどやされるのよ!」

「また他の男…愛、財布出せ。いくらスつた?」

「お生憎様、ヤクザの施しは受けない主義なの。自分で何とかするわ。それから、愛って呼ばないで。もうその名前じゃないんだから。」

「いいじゃねーか、俺だけの特別。」

「同じ事を言つた男が、東署に一人いたわね。」

そう嘲笑つた女の脳裏には、この男とは別の、しかし、本当によく似た性格の持ち主の顔が浮かんでいた。

「あんな、気障野郎と俺を一緒にすんじゃないよ。」

「あたしに言わせりゃ、十分つて言う程、あんたも『気障野郎』
ヤマニシマナミだけだね。…とにかく、あたしには山西愛美^{ヤマニシマナミ}っていう名前があるから、山西さん、もしくは山西様つてよそよそしく呼んでいただけるかしら?」

「…愛、今年こそは付き合ってもらうぜ?」

「話が唐突な上に、肝心な事は聞こえない素敵な脳と耳を持つて
るのね。」

こつという性格だから、この男とは極力関わりたくないのだ。自分も大概人の話は聞かないが、この男はさらにその上をいく。

「3年も、おあずけ喰らってんだ。今年こそは、」

「悪いけど、今年もお預けね。」

ニヤリと笑みを浮かべる。女のその言葉と笑いが何を意味するか知っている男は、たちまち機嫌を急降下させた。

「お前、まさか……」

「その、まさか。」

女は、遠くの方から、こちらに向かって走ってくる一人の若者に目をやる。そして、こう言った。

「……合格よ。」

「すいません！！山西探偵事務所ですけど？麗子さんいらつしやいますか！！」

店の裏口から大きな声でそう叫ぶ。営業は終わっているのに、麗子以外は誰もいないはずだ。何の音沙汰もないので、もう一度叫ぼうと腹に力を込めたその時、ガチャッとドアが開き麗子が顔を覗かせた。

「ごめんね、電話してたからすぐに来れなかったの。」

「あ、いえ……だ、大丈夫です。」

広海は、緊張から少し口ごもった。夜の世界で生きる者に、彼女を知らない人間はいないからだ。彼女は、それはそれは美しかった。そして、器量がよかった。広海の昔の知り合いで、彼女に憧れる者を大勢知っている。

「今年は、あなたなのね。」

おめでとくと、微笑みながら広海を中に通した。何がめでたいのか分からない広海は、麗子の言葉に首を傾げながらも、とりあえず店の中に入った。

「…どうぞ、お酒って訳にはいかなから、紅茶だけど。」

「あ、おかまいなく!!」

「そう堅くならなくてもいいわよ？楽しんでちょうだい。」

「は、はぁ…」

「あなた名前は？」

「あ、広海です。広海陽平。」

これからよろしくお願いしますと、頭を下げた。

「こちらこそ、よろしく。ねえ、間違っていたらごめんなさい。

私、陽平をどこかで見た気がするんだけど…、もしかしてこっちの仕事をしていたことあった？」

彼女が指す『こっち』とは、夜の仕事のことだということは、すぐにわかった。

「はい。3ヶ月前までホストクラブで働いていました。」

「そう…、やっぱりね。」

「でも、恥ずかしい話、ホストなんて名前だけで、指名が取れないで殆ど店の雑用ばっかやってました。」

「最初は、みんなそうよ…恥ずかしがることなんてないわ。私だってそうだったもの。」

「麗子さんもですか!？」

広海は、信じられないという顔で麗子を見た。

「最初からNo.1なんてあり得ないわ。それぞれに苦労と努力を重ねて今があるのよ。…私は、この世界に入るのが少し遅かったから尚更だったわ。」

「そうだったんですか…、」

「ねえ、どうして探偵事務所に？」

「所長に助けられたのがきっかけです。他に行き場がなかった俺を、来るかと誘ってくれました。」

「そう。仕事は、楽しい？」

「はい!!…あ、でも、おもいつきり所長にはこき使われていますけど。」

これは内緒でと、笑う広海に、麗子は、今の仕事を心の底から楽しいんでいるんだと、顔を綻ばせながら思うのだった。

「あら、やだ…こんなんびりしている時間なかったんだったわ。」

何かを思い出した麗子が、突然立ち上がる。

「夕方からお得意様と食事に行かなきゃいけないから、美容院を予約してるのよ。」

ちよつと待つてねと、奥の部屋へ消えて行く。しばらくして、上品な風呂敷に包まれた依頼品の弁当を持って帰ってきた。

「これを銀簞会の石神さんインガミに渡して欲しいの。」

広海は、麗子から依頼品を受け取る。

「今日、石神さん誕生日でね、プレゼントに毎年手作りのお弁当を渡しているのよ。」

銀簞会の石神と言えば、組随一の武闘派で知られているヤクザだ。彼には有名なエピソードがあり、17年前、銀簞会と島争いを繰り広げていた洪沢組に、当時、ただの構成員だった石神が一人で乗り込み、組長を半殺しにて半壊滅状態に陥れた。

その事件で、10年と8ヶ月もの刑期をくらいはしたが、出所した彼を待っていたのは、銀簞会始まって以来の最年少幹部の座だった。そして、次の若頭候補に一番近いと噂されている、極道のエリート道をまっしぐら中の彼に、弁当を作るなんて…もしかして、麗子と石神はただならぬ関係なのだろうか、考えを巡らせた。

「あ、先に言うておくけど、私と石神さんは何でもないからね。」
顔に出ていたのだろうか…、念のために言うておくけどと付け足す彼女の言葉に、広海は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それじゃあ、よろしくね。」

「はい。…あ、そうだ。石神さんは事務所の方にいらっしやるんでしょうか？」

「所長は…、愛美は、今日どこか出かけてる？」

「ええ…、確か競馬場に…」

なぜ、そこで所長が？疑問を口にした。

「『愛美がいる所に石神在り』かしらね。競馬場を訪ねてごらんなさい。そこに彼はいるわ。」

「は、はあ…」

広海は、手にした依頼品を鞆にしまうと、半信半疑で麗子の言うとおり、石神がいるであろう競馬場へと向かうのだった。「陽平！！こつち！！」

愛美は、走ってくる広海に手を振った。

「アレが、新入りか。」

その横で、男は、苦虫を潰したような顔で広海を睨んでいた。

広海は、二人の対照的な表情を見比べながら、そのまま走り去りたい気持ちに駆られた。

「所長、おはようございます。」

「もう、こんなにちはの時間だけどね。ちゃんと依頼品持ってきた？」

「…はい。あ、あの…」

鞆から依頼品を取り出し、凄いオーラを放ちながら睨んでくる石神の前に差し出した。

「こ、これ…麗子さんからの…」

「睨んでないで、取ってあげて。」

「……チツ、」

舌打ちをし、広海から奪うように弁当を取る。

「た、たしかに…お、お渡ししました。」

なぜ、弁当を運んできただけの自分が、こんな横柄な態度で接されなければいけないのか。そういう思いが頭を過ぎるが、どんなに腹が立ったとしても、それを口と顔に出せば一巻の終わりだということを知っているので、広海は悟られないようにと顔を俯けるのだった。

いまだに睨まれ続けている広海が不憫に思ったのか、愛美はため

息を一つつき、石神に向かってこう言った。

「そんなに睨まないでやってくれる？ただでさえ怖いのに…、完全にビビってるじゃない。司^{ツカサ}が心配するようなことはないから。…

陽平は、明日香に片思い中なんだから。」

「香^{カオリ}に？」

「ちょ、所長！？」

初対面の人間に、自分の片思いをしている女性をバラされ、広海は慌てて顔をあげた。

「…そうか、香にね…」

「ち、ちがい…」

「この子、意外と純だから不憫だね…」

「だ、だから違う、」

さっきまで睨んでいたはずの石神が、明日香に片思いと聞き、その表情を一変させ、哀れみの眼差しを広海に向ける。

いきなりのことに、彼が、明日香を香と呼んだことに気付きもしない広海は、必死で二人に否定をするのだった。

「ま、人生色々だ…。何が起きても気を落とすなよ。」

「え！？石神さん！？」

「じゃあ、麗子の弁当も貰ったし…今日の日は、仕方ないからこの兄ちゃんに譲ってやるよ。…愛、またな。」

そついうと、石神は、慌てふためく広海の肩を一つ叩いて帰って行くのだった。

「酷いですよ、所長！！」

石神が去った後、広海は半べそをかきながら愛美に詰め寄った。

「うるさいわね？済んだことをうだうだ言ってんじゃないわよ。

あんたを助けてあげたんだから、むしろ感謝してもらいたいぐらいだわ。」

愛美は、そうふんぞり返ると、泣きつく広海を一蹴した。

「あ、明日香さんに…い、石神さん！？」

「…そんな野暮、アイツは言わないわよ。だから、その汚い顔をなんとかしなさい。…あたしのＴシャツに鼻水ついたらぶつ殺すから。」

「す、すいません!!」

広海は、鞆からポケットティッシュを急いで取り出し顔を拭いた。

「さ、帰るわよ。みんな準備して待つてると思うし。」

「…準備つて?」

「陽平の採用祝い。」

「……え?」

「今日の依頼は、探偵事務所が出来て、まだ仕事がなかったあたしを、見かねた麗子が初めてくれた仕事でね…うちはそこから始まったのよ。だから、毎年、石神の誕生日は新人りの採用試験に使わせてもらつてるの。」

「そうなんですか…つて、俺、最初から採用じゃなかったんですか!?!」

すっかり採用されているものだと思つていた広海は、愛美の発言に、驚きを隠せない。

「なに言つてんのよ? 3ヶ月は研修期間、これ基本でしょ。」

「だ、だつて…あの時、俺に来るかつて!!」

「採用しますとは言つてないでしょ?」

「さ、詐欺だ!!」

サラツと言つてのける愛美に、広海はそう叫んだ。

「いいじゃないの。無事、採用されたんだから?」

「それは…、」

確かにそうだが、なんだかしっくりこない。

「ところで陽平、今いくら持つてる?」

「今ですか? 6千円ですけ…」

なぜ、そんなことを聞くのか分からないが、とりあえず答える。

「6千円? しけてんなあ…。」

「ほつとして下さい！！お金ないんだから！！」

「なんでないのよ？給料結構な額出してるわよ？」

「でも、そこから8万円天引きされてるじゃないですか！！」

店の弁償代がと、叫ぶ。

「当たり前でしょ？誰が壊したと思ってるの？」

「俺じゃないことは確かです。」

「なにそれ？なにその目？あたしが壊したって言いたいのか？あの時、あんた誰のおかげで助かったと思ってるの？あたしが真相を暴いたから助かったのよ？まあ…その過程で、少しでも店の物を壊したことは確かにあつたけど…でも、それは、陽平を助けるために仕方なくしたことだから、あんたが払うのが道理つてもんでしょ？」

「そんな道理俺は知らない。」

それに、少しでもいい。店の半分は壊れたと、口にはしなかったが、抵抗の意味も込めてあえて顔に出した。

「採用されて、給料も正規で貰えるんだし…その話はもうお終い。」

「納得いかない！？」

「そんなことより、もうその6千円でいいから半分よこしなさい。」

「なんで！？」

「なんでって、あたしが競馬で財布ごとスったからに決まってるでしょ？」

「はあ！？意味分かんない、絶対嫌です！！」

「嫌って…それこそ意味分かんない。全部スったってのがバレたら琉二に怒られるでしょ？」

「一回怒られたほうがいいですよ？」

怒られなければ分らないこともある。広海は、目の前にいる雇い主が、まさしくそれだと思った。

「…へえ、そんなこと言うんだ…」

「な、なんですか！！」

「明日香に言っちゃおうかな？陽平が好きだって言ってたって」。

「え、」

「うん、そうしよう…言っちゃおう。」

「わ、や…やめて下さい!!」

この人なら言いかねないと、広海は必死で止める。

「なら、半分…ね？」

「……………」。

広海に選択の余地はなかった。

「さ、帰るわよ。」

見事3千円を恐喝し、ご機嫌な愛美の背中を、まるで山賊のようだと見送る広海だった。

何はともあれ、こうして彼の山西探偵事務所での生活が、今度こそ本当にスタートするのだった。

おわり

File 1・なけなしの3000円（後書き）

読んでいただきありがとうございます（・・）
いかがでしたか？

試しに一話を書いてみたのですが、つまらなかったでしょうか？
心配です（・ω・）

不定期掲載なので、次はいつになるか分かりませんが、1ヶ月に一回くらい更新できたらいいかなと考えてます。

一応、この話の主人公は、
所長の山西愛美です。

広海陽平ではありません。

それから、山西探偵事務所には、陽平と明日香と琉二以外に、大川修吾という筋肉担当の従業員がいます。

次には、出したいと思います。

それでは、皆さま

また（・ω・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1054u/>

山西探偵事務所

2011年6月23日13時48分発行